サロン 2002 からのメッセージ

私たちの“志”は「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」です。

“志”の実現に向けて、人と情報のネットワークを築きながら、さまざまな事業に取り組んできました。

広報誌『游 ASOBI』に、私たちからのメッセージ 2 編掲載します。

一つは「オリンピズムを教育に」です。“ゆたかなくらしづくり”に欠かせない、人材育成に関する内容です。近代オリンピックの創始者クーベルタンや、日本におけるオリンピック運動の嚆矢である嘉納治五郎が求めた“真の教育”を、2020 年以降にしっかりと根付かせていこうというメッセージです。2016 年 2 月 27 日に筑波大学附属中高で開かれた「筑波大学附属学校研究発表会」で中塚義実が報告した内容を再掲してご紹介します。その後の動向についても新たに書き加えました。

このような思いを持って、私たちは「クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム」をはじめとするオリンピック教育事業に関わりを続けています（今年度の事業報告は p.90 ～ 93 参照）。

もう一つは「ユース年代にリーグ戦を」というメッセージです。いまでこそユースサッカーリーグは当たり前になってきましたが、その始まりは 1996 年度の「DUO リーグ」の設立にあるといえるでしょう。同リーグの初代チェアマンとして創設と情報発信に努めた中塚義実が、2001 年 3 月 16 日発行の「高校サッカーを考える会　会報第 3 号」に投稿した内容の一部を転載します。リーグ開始 5 年目の試行錯誤の様子と、ぶれない理念に沿って展開されていることがこの文章からご理解いただけるのではないでしょうか。

「ユース年代にリーグ戦を」のメッセージはもう二編あります。一つは、NPO 法人サロン 2002 主催「第 3 回 U-18 フットサルリーグチャンピオンズカップ」報告書の挨拶文です（事業報告は p.86 ～ 88 参照）。「レベルアップ」とともに「リーグ環境の整備」を目標に掲げるこの競技会のねらいに沿って、「リーグ戦は最高の遊び」との表題をつけました。さらに“あそび”つながりで、2019 年 1 月 26 日に開かれた筑波大学附属小・中・高の保健体育科合同研究会資料から、「“遊び心”を育む」と題する文章を転載しました。これらをあわせて、「ユース年代にリーグ戦を」のメッセージといたします。

オリンピズムを教育に

－国際ピエール･ド･クーベルタン･ユースフォーラムを通して－

平成 27 年度　筑波大学附属学校研究発表会　配布資料
主催：筑波大学附属学校教育局
平成 28(2016) 年 2 月 27 日　於筑波大学附属中学校 育鳳館

1. はじめに
－「オリンピック教育」とのかかわり

2010 年 8 月末、阿部生雄教育長（当時）から一本の電話が私のもとに入った。筑波大学が中期計画に「オリンピック教育」を盛り込み、附属学校と連携しながら進めていくことになるので「中塚君に附属学校の取りまとめをやってもらえないか」という内容である。

筑波大学の院生時代から研究面でお世話になっていた阿部先生からの依頼である。教育長だからというよりも、研究・実践の“当事者”としてお断りするわけにはいかない。とは言うものの、「オリンピック教育」という言葉には違和感があったし、いま一つ素直にはなれなかった。

「オリンピック選手を育てるための教育なんでしょ？」

「エリート教育のことでしょ？」

「オリンピック招致活動の一環じゃないの？」

「体育科でやればいいんじゃないの？」

など、さまざまな反発が現場から挙がってくることは容易に想像できたし、実際そうであった。個人的には、「せっかくスポーツが文化として市民権を得るようになってきたのに、また教育に引き戻されるのか」という不安・不満もあった。生意気にもこのようなことを阿部先生に申し上げた覚えがある。

国際ピエール･ド･クーベルタン･ユースフォーラム（第1回～第7回）

第1回　1997年　ル･アーブル（フランス）
第2回　1999年　マッチ･ウェンロック（イギリス）
第3回　2001年　ローザンヌ（スイス）
第4回　2003年　アレンツァーノ（イタリア）
第5回　2005年　ラートシュタット（オーストリア）
第6回　2007年　ターボル（チェコ共和国）
…田原氏初参加、日本に紹介
第7回　2009年　オリンピア、パリニ（ギリシア）
…日本初参加（都立国際高校）

９月から学校が再開し、日々のあわただしさの中で、依頼されていたこともすっかり忘れていた。そんな折、再び阿部教育長から電話があった。10 月初旬のことである。「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム（以下、国際 YF）という、オリンピック教育の国際交流プログラムがある。2011 年の北京大会に日本から派遣する高校生 2 名を筑波大学から出してもらえないかとの依頼があった。附属高校から出してもらうことは可能だろうか」という話である。

数日後、阿部教育長の執務室（当時は旧文京５中の校舎内にあった）には、同フォーラムを主催する「国際ピエール・ド・クーベルタン委員会（CIPC）」の田原淳子理事（国士舘大学教授）と阿部教育長、そして私がいた。同フォーラムの位置づけと概要、依頼の趣旨と今後の展望などについて話を伺い、「これは大ごとになった」と思う一方、「おもしろくなってきた」とも感じた。

こうして私はいきなり「オリンピック教育」の当事者となった。その後、学校内外で「オリンピック教育」を推進する立場となり、現在に至る。

本報告は、いきなり当事者になった者の視点から「オリンピック教育」の現状と今後について考察するものである。報告書には、引率教員として参加した過去 3 回の国際 YF に関する資料の一部を記載した。

2. 第8回　北京大会（2011 年）へのオブザーバー参加

1997 年の第 1 回大会以来、2 年ごとに開催される国際 YF に日本が初参加したのは 2009 年の第 7 回大会である。東京都が 2016 年の招致活動をしていたこともあり、CIPC の田原理事 (当時。現副会長) は

東京都教育委員会に話を持ち込み、都立国際高校の生徒 2 名と教員 1 名が参加した。

世界中にあるクーベルタンスクールから 7 名の生徒と 1 名の教員が参加するのが国際 YF の一般的な参加単位である。しかしクーベルタンスクールでなくても、今後「オリンピック教育」を推進していこうとする国や地域からオブザーバーとして 2 名の高校生と 1 名の教員を受け入れる制度がある。第 8 回（北京大会）と第 9 回（リレハンメル大会）に参加した筑波大学附属高校はこれにあたる。なお、現地滞在費はすべて CIPC が、渡航費は筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）が負担してくれて大いに助かった。

第8回　北京大会の概要

【期　日】2011年8月13日（土）～21日（日）
※8/13am9:25羽田発～8/21pm8:15羽田着
【会場・主催校】北京第四中学校
※アジアで唯一のクーベルタンスクール
【参加国】オーストラリア、オーストリア（2校）、中国、チェコ、エストニア、ドイツ（2校）、イギリス、ギリシャ、イタリア、メキシコ、ノルウェー、スロバキア、チュニジア（ここまではクーベルタンスクール。各校7名）
コンゴ、キプロス、日本、ケニア、モーリシャス、マレーシア
（斜体下線はオブザーバースクール。各校2名）
※参加生徒117名、引率教員22名、スタッフ約20名、ボランティア（北京四中）約70名
【本校からの参加】生徒：山西優香（3-1）、星野慧（2-6）
引率教諭：中塚義実（保健体育科）

オブザーバーと言っても、生徒は基本的にすべてのプログラムに参加する。それは、クーベルタン賞をめぐるプログラム（地域貢献活動、スポーツテスト、知識テスト、芸術プログラム、オリンピックの価値についての討議）と、文化交流、相互交流プログラムで構成される。

2011 年 4 月 11 日、全校生徒がそろう始業式で、はじめて生徒にこの事業を紹介し、募集を開始した。7 名の生徒がエントリーし、レポートや面接などで 2 名を選考した。その後は、総合的な学習の時間や放課後を使って事前学習を行い、手探りながらもしっかり準備をして臨んだ。

参加した 2 名の生徒は、最初の方こそ言葉の壁を感じていたようだが、コミュニケーションは言葉だけではない。スポーツや音楽、ダンスなどを通して互いの理解を深め、仲間の輪を広げていった。二人ともクーベルタン賞を受賞し、関係者からも高い評価を得ることができた。

筆者自身は「オリンピック教育とは何か」を実際に見て、感じてくることを目標に掲げ、おおむね達成できた。まずクーベルタン賞のなかみ自体がクーベルタンの思想「オリンピズム」を反映したものであり、それが「オリンピック教育」の内容であると判断できた。また、プログラム全体を通して、異文化理解と国際交流、更には平和への貢献といったメッセージが感じられ、様々な活動の中で「オリンピズム」が印象付けられた。

ヨーロッパ主導で「オリンピック教育」が展開されていると思う一方で、日本では学校教育のさまざまな場面で「オリンピック教育」はすでに十分為されていると感じた。嘉納治五郎に始まる日本の「オリンピック教育」を再評価し、日本から世界に発信していくことが重要ではないかと思った。

3. 第9回　リレハンメル大会（2013 年）へのオブザーバー参加

第 9 回大会も筑波大学附属高校から 2 名が参加することになり、2012 年 10 月 4 日の前期終業式で全校生徒に告知し、募集を開始した。

5 名の生徒がエントリーし、前回同様、レポートと面接などで 2 名を選考した。事前学習は主に放課後、定期的に実施した。前回の蓄積もあり、効果的に準備にあたることができた。

参加した生徒は今回も非常に意欲的に取り組んだ。2 名とも剣道部員だったこともあり、アートパフォーマンスでは剣道の型を披露した。諸外国の参加者には大きなインパクトを与えたようである。今回も二人の参加者は高く評価され、次回からのフルメンバー（7 名）参加の道筋を作ってくれた。

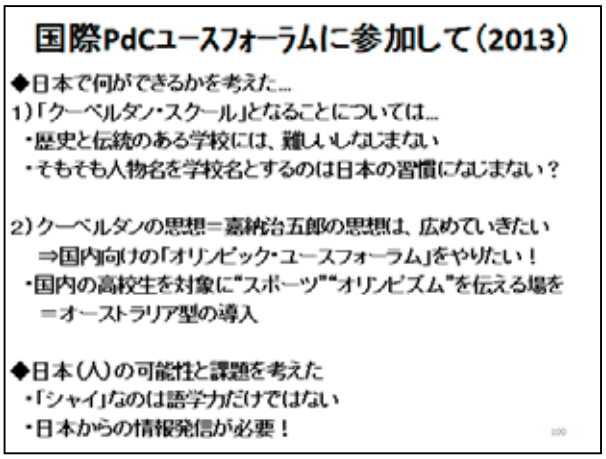
第9回　ノルウェー大会の概要

【期　日】2013年8月10日（土）～18日（日）
※8/9am11：40成田発～8/20am9：30成田着（約15時間のフライト）
注）飛行機の遅れにより、予定より帰国が1日遅れた
【会　場】主会場：リレハンメル（1994冬季五輪会場）
主催校：Gausdal videregaende skole - Pierre de Coubertin
【参加国】オーストラリア、オーストリア（2校）、中国、チェコ、エストニア、ドイツ（2校）、イギリス、ギリシャ、イタリア、ノルウェー、ロシア、スロバキア（ここまではクーベルタンスクール。各校7名）
キプロス、日本（筑波大附高）、ケニア、モーリシャス、マレーシア
（斜体下線はオブザーバースクール。各校2名）
※17か国19校。参加生徒100名、スタッフ20名、ボランティア30名余
【本校からの参加】生徒：皆川陽子（3-2）、加納時定（2-5）
引率教諭：中塚義実（保健体育科）

初参加の前回は「オリンピック教育とは何か」を探ることを問題意識として持っていたが、今回は「日本

で何ができるか」を考えながら過ごしていた。現地では CIPC の田原理事ともいろいろ話をした。

7 名のフルメンバーとなる次回は、単独校でなく複数校から生徒を選んで参加したい。その方がオリンピズムを広げることができるだろう。そのための国内版ユースフォーラムを実現させる。そのためにはさまざまな機関と連携・協力し、「オールジャパン」で臨む



ことが大切である…。

このように考え、CORE はもちろん、日本におけるオリンピズムの推進に長く取り組んできた NPO 法人日本オリンピックアカデミー（JOA）や、「スポーツを通しての“ゆたかなくらし“」を”志”に掲げる NPO 法人サロン 2002（筆者が理事長を務める）などと連携しながら次の段階を模索した。

4. 国内 YF へ向けて

応募してきたのは男女あわせて 10 名。全員が国内 YF へ参加できるものとし、11 月から週 1 回、放課後に集まって事前学習を実施した。

まずは「筑波大学附属高校を海外の人に紹介しよう」というテーマである。10 人で話し合い、「概要」「運動」「歴史」の 3 班に分かれて調べ、まとめ、発表した。

1 ～ 3 月は「オリンピック・パラリンピックを知ろう」というテーマのもとで、①古代ギリシャ、②ピエール・ド・クーベルタン、③オリンピックの諸問題、④パラリンピック、⑤日本とオリンピックのかかわりについて調べ、最後に発表会を行った。

4．クーベルタン - 嘉納ユースフォーラムの実際

2015 年 3 月 13 日（金）～ 15 日（日）、筑波大学および筑波研修センターにてはじめての国内 YF が開かれた。筑波大学附属高校 (9 名)、附属駒場 (3 名)、附属坂戸 (3 名) と、趣旨に賛同した帝京高校 (4 名)、自由学園 (6 名)、中京大学附属中京高校 (5 名) から男女各 15 名、計 30 名の高校生が集まった。初日は学校紹介と「野性の森」での野外活動、2 日目は嘉納治五郎やクーベルタンについての講義、陸上競技場でのスポーツテスト（走・跳・投）、英語によるグループ討議、最終日はグループ討議の発表と筆記テストと盛り沢山な 2 泊 3 日であった。

バランスのとれた人間形成と世界平和への貢献は、クーベルタンも嘉納治五郎も願っていたことである。普段は交わることのない他校生との 2 泊 3 日は、オリンピズムの何たるかを感じ、いま何をすべきかを考えるきっかけとなっただろう。

国内 YF 終了後、CORE と NPO サロン 2002 が、JOA の協力を得て 7 名の生徒を選考した。

次のとおりである。

筑波大学附属高等学校　…

阿部道彦(3 年男)、平田東夢(3 年男)、高橋優衣(2 年女)

自由学園　…

原嶋百香 (女子部高等科 2 年)、古里光 (男子部高等科 2 年)

帝京高等学校　…

池田和真 (2 年男)

中京大学附属中京高等学校　…

井内理紗子 (3 年女)

5. 本大会へ向けての準備

全員が集まっての事前学習・事前準備の機会は、計 3 回持つことができた。

第 1 回…4 月 26 日 (日) 15：00 ～ 16：45　於筑波大学附属高校＆占春園
顔合わせ、旅程と課題の確認

第 2 回…6 月 7 日 (日) 12：00 ～ 17：00　於自由学園女子部
講義「世界と日本の体育・スポーツのあゆみ」、課題ポスター制作、ミニエキスポ準備

第 3 回…6 月 28 日 (日) 12：00 ～ 17：00　於自由学園男子部
講義「近代オリンピックのあゆみ」「日本のスポーツ百年 (DVD 学習)」、課題ポスター制作、

全校生徒各位　　2014.10.3.

筑波大（のちスロバキア）で、全国各地（のち世界中）の高校生と、オリンピックについて語りませんか？

－第 10 回　国際ﾋﾟｴｰﾙ･ﾄﾞ･ｸｰﾍﾞﾙﾀﾝ･ﾕｰｽﾌｫｰﾗﾑおよび国内ﾕｰｽﾌｫｰﾗﾑについて（参加者募集！）－

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）
筑波大学附属高等学校

2020 年東京オリンピックの開催が決まり、少しずつ、各分野で準備が始まっています。「オリンピック教育」という言葉も、以前より目にすることが多くなってきたのではないでしょうか。

オリンピックが「4 年に一度開かれる、スポーツの国際的競技会」ということは誰もが知っていることでしょう。しかし残念ながら、オリンピックの真のねらいである「オリンピズム」について、あまり語られることはありません。それは、体と心と知性の調和的発達を目指した人間の育成と、国際理解・国際平和の推進が核となる人生哲学であり、近年は「卓越（Excellence）」「友情（Friendship）」「尊重（Respect）」という言葉でその価値が表現されています。4 年に一度の競技会は、これらの理念を広め、実現させていくための一つの方法なのです。

こうした理念に基づき、世界中から高校生（約 100 名強）が集まり、座学や身体活動を通して学び、交流を深め、次代の人材を育てる目的で、2 年に一度「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」が開かれています。本校は 2011 年の北京大会、2013 年のリレハンメル大会にそれぞれ 2 名の生徒を派遣し、「嘉納治五郎の学校からの参加者」として注目され、高く評価されています。

これまではオブザーバースクールとして 2 名のみの派遣でしたが、これまでの実績が評価され、2015 年の第 10 回スロバキア大会では、本校を含め「日本から 7 名」を受け入れてもらえることになりました。そして全国各地の高校生が筑波大に集まり、オリンピズムについて学ぶとともに、第 10 回大会へ派遣する 7 名を選考する場として、CORE 主催で「国内オリンピック教育ユースフォーラム（仮称）」を開催することになりました。

まずは国内オリンピック教育ユースフォーラム（仮称）の参加者を募集します。趣旨に賛同し、意欲的に取り組む人の応募をお待ちしています。

大学会館前の嘉納治五郎像にて
参加生徒・スタッフ集合

第10回　スロバキア大会の概要

【会　場】開催都市:ピエスタニ（スロバキア）
主催校：Gymnázium Pierre de Coubertin Piest'any
【参加国（ABC順）】アルゼンチン、オーストラリア、オーストリア、ブラジル、チェコ、エストニア、フランス、ドイツ、イギリス、ギリシャ、イタリア、日本、ケニア、マレーシア、ノルウェー、ロシア、南アフリカ、スロバキア、ジンバブエ
※19か国21校。参加生徒110名、ボランティア約30名
【宿　舎】2～3人の相部屋。シャワーは4～5人で共用。食事は充実（ボテトが印象的）
【日本との往復】
8/27(木)　11：20成田～15：20ウィーン（約11時間）※時差7時間
8/29(土)午後　バスでウィーン～ブラチスラバ～ピエスタニ（約2時間）
8月29日（土）～9月5日（土）　第10回国際YF
9/5(土)　早朝　バスでピエスタニ～ブラチスラバ～ウィーン
9/5(土)　13：20ウィーン～9/6(日)　am7：00成田着（約11時間）

ミニエキスポ準備（日本の夏祭りをテーマとする）、「よさこいソーラン節」練習

番外編…7 月 27 日（月）午後（池袋周辺。都内の生徒のみ）

4 校 7 名には都内だけでなく名古屋の生徒もいる。事前学習はスケジュール調整が大変だった。足りないところはメール等で補い合って準備を進めた。派遣のための体制づくりも並行して進めてもらった。派遣母体は日本クーベルタン委員会（CJPC）。現地での滞在費は CIPC、渡航費は参加者負担であるが、ほとんどは学校が負担していた（本校の場合は筑波大学）。

6. 第10回　ピエスタニ（スロバキア）大会（2015年）

主なプログラム

◆クーベルタン賞に関する活動◆
1）社会貢献活動 … 事前に行う、地域のボランティア活動
2）知識テスト … オリンピズムについての筆記テスト
3）スポーツテスト… 水泳（50m自由型）、60m走、走幅跳、バスケのボード当て（いずれも基準値あり）
4）アートパフォーマンス … 10のワークショップから選択 ダンスや音楽・絵画などを各国の参加者とともに行う
5）グループ討議 … 3つのテーマでオリンピズムについて討議
◆スポーツ活動・文化交流活動・スロバキア観光◆
1）カヌー、ビーチ活動、サイクリング、パラリンピック種目、ダンス等
2）ミニエキスポ … 各国がブースを設けて交流。日本は「夏祭り」
3）リルハンメル市民に対する各国のダンス … 日本はソーラン節
4）観光 … ピエスタニ市内／スモレニース城など

大会概要と主なプログラムはスライドのとおりである。主催者のCIPCも、よりよいフォーラムにすべく毎回工夫しているのがわかる。以前は学校別・国別に行っていたアートパフォーマンスを、今回は10のワークショップから参加者が選択し、多国籍の選択者とともに作品をつくり上げる形であった。この方が交流も深まるし良いと思った。北京大会から導入されたミニエキスポも、各国の文化交流の場としてすっかり定着している。

7名の生徒にはかけがえのない、貴重な体験となった。ここでの学びを仲間に伝えてもらいたい。

7. 今後に向けて

高校生年代の「オリンピック教育」をどのように展開していくかを、長い目で考え、創り上げていく必要がある。2020年の東京オリンピックは“きっかけ”であり“節目”であるが、オリンピックやパラリンピックがあるから「オリンピズムを教育に」と言っているのではない。オリンピズムはもっと普遍的な思想として位置付けられるべきである。

「オリンピック・パラリンピック教育」との表現は、競技会のための教育のようにもみえる。「オリンピック教育」という表現も本当は不要で、単に「教育」でよいのではないか。ただし“真の”教育である。

主なプログラム

◆クーベルタン賞に関する活動◆
1）社会貢献活動 … 事前に行う、地域のボランティア活動
2）知識テスト … オリンピズムについての筆記テスト
3）スポーツテスト… 水泳（50m自由型）、60m走、走幅跳、バスケのボード当て（いずれも基準値あり）
4）アートパフォーマンス … 10のワークショップから選択 ダンスや音楽・絵画などを各国の参加者とともに行う
5）グループ討議 … 3つのテーマでオリンピズムについて討議
◆スポーツ活動・文化交流活動・スロバキア観光◆
1）カヌー、ビーチ活動、サイクリング、パラリンピック種目、ダンス等
2）ミニエキスポ … 各国がブースを設けて交流。日本は「夏祭り」
3）リルハンメル市民に対する各国のダンス … 日本はソーラン節
4）観光 … ピエスタニ市内／スモレニース城など

クーベルタンも嘉納治五郎も、“真の”教育を求めていたのではないだろうか。それは、心と体と知性のバランスのとれた人間の育成であり、世界平和につながる理念なのである。

スロバキア大会参加者集合写真

その後の動向

1．国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムと国内ユースフォーラム（YF）

・国際 YF の第 11 回大会は 2017 年 8 月 19 ～ 26 日、エストニアのウルヌムレで開かれ、世界五大陸 23 カ国から約 120 人の高校生が参加した。日本からは内田佳菜美（筑波大附）、三木勝輝（附属駒場）、伊豆野竜也・益子好恵（附属坂戸）、酒井大治郎（自由学園男子部）、岩越麻耶（中京大附）、木全解（至学館）の 7 名の生徒と、引率の藤原亮司氏（附属坂戸）が参加した。事前研修は 7 月中旬、附属坂戸高校において 2 泊 3 日で行った。

・選考を兼ねた国内 YF は 2016 年 12 月末に筑波大と中京大で開かれた。このときの派遣母体は JOA（日本オリンピックアカデミー）。国内 YF も JOA 主催とするため、「JOA ユースセッション」が冠に付くことになった。国際 YF への派遣母体と国内 YF の主催者については課題が残った。

・国際 YF の主催団体である CIPC（国際ピエール・ド・クーベルタン委員会）の日本組織 CJPC が、2019 年 1 月 1 日付で正式に設立されることとなった。今後は CJPC が国際 YF への派遣母体となり、選考会を兼ねた国内 YF は CJPC の認可を受ける形となる。

・国際 YF の第 12 回大会は 2019 年 8 月 24 ～ 31 日、フランスのマコンで開かれる。2018 年 12 月末に筑波大と中京大で国内 YF が開かれ、髙橋りく・萩川典子（筑波大附）、高田伊知郎（附属坂戸）、八木暁（自由学園男子部）、高田和実（自由学園女子部）、成田乙葉（中京大附）、星静（名古屋大附）の 7 名が選考された。引率は自由学園女子部の山田恵子氏である。

2．クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム

・2 年に一度、国際 YF の選考を兼ねるときは筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）主催、NPO 法人サロン 2002（NPO サロン）共催、JOA の後援・協力の形となる。中間年は国際 YF とはつながらないが、別の形で開催している。2018 年 3 月初旬、筑波大学附属中高の桐陰会館に 2 日間、通いで「クーベルタン - 嘉納ユースフォーラム 2017」が開かれた。主催は東京都高体連研究部。高体連とどのように連携していくかが今後の課題である。

・NPO サロンは、クーベルタン - 嘉納ユースフォーラムの共催団体として、運営面とプログラム構築に貢献している。なお、2013 年度の第 9 回国際 YF に日本代表として参加した皆川宥子は 2018 年度より NPO サロンの事務局の仕事を担っており、今年度の国内 YF にも帯同した。

3．スポーツ庁オリパラ教育推進事業

・2020 年東京オリンピック・パラリンピック開催を機に、東京都だけでなく全国各地に「オリパラ教育」を推進すべく、スポーツ庁の標記事業が展開されている。筑波大学は当初から実施主体として関わり、今では早稲田大学、日本体育大学も加わり、2018 年度は全国 35 自治体が取り組んでいる。

・2020 年以降にこの事業が継続される見通しはない。「オリパラ教育」はどうなっていくのだろう…

4．何を残すか

・「2020 年へ向けて」よりも「2020 年以降に何を残すか」がより重要であると考える。「オリンピック教育」（または「オリパラ教育」）の名のもとに“真の教育”のすがたが少しずつみえてきた。持続可能な“真の教育”の実現に、NPO サロンも何らかの形で貢献していきたい。

文責：中塚義実（特定非営利活動法人サロン 2002 理事長）

ユース年代にリーグ戦を①

ユース年代のサッカー環境を見直そう

－底辺からのリーグシステム導入を－

中塚義実　(筑波大学附属高等学校教諭, DUOリーグチェアマン)

「高校サッカーを考える会　会報第３号」より転載
平成 13(2001) 年 3 月 16 日発行
注）文中の個人名の所属は当時のものである。

■はじめに

中学時代は熱い先生の指導の下での熱血運動部、高校時代は生徒主体の運動部、大学では 100 人の大所帯で全国一を争う伝統的運動部と、タイプの異なる学校運動部にお世話になった。その中で学んだことはサッカーのプレーだけではなく、非常に多岐にわたる。私自身の“スポーツ観”の一部分と“スポーツ習慣”の大部分が、20 世紀の学校運動部の中で形成されたことは間違いない。しかし、自分の運動部体験を振り返ってみると、「このままでいいのか」という疑問と試行錯誤の繰り返しであったように思う。

大学院でスポーツ社会学を専攻し、「スポーツとは何か」「これからの社会においてスポーツはどう位置づけられるのか」などを研究する中で、「このままでいいのか」に対する回答は徐々に整理されてきたように思う。それでも教員になって高校の指導現場に立ってみると、理論だけでは通用しない現実の厳しさや、“習慣を変える”ことの難しさを日々感じながら今日に至っている。

20 世紀の日本のスポーツを学校が大部分担ってきたことについては異論の余地がない。戦後はこれに企業が加わり、学校と企業にささえられた日本独特のスポーツシステムが完成した。しかしこのシステムは、学校や企業があって初めて成り立つシステムであって、スポーツの自立とは程遠い。こういったシステム上の大きな欠陥は、20 世紀の終わりの 10 年間に、学校運動部の危機と企業運動部の相次ぐ廃部という形で顕在化してきた。21 世紀に入った今、“意識”や“習慣”の大幅な転換が求められているのである。

今回、「高校サッカーを考える会」の会報にレポートを書く機会が与えられ、大変感謝するとともに、大きな責任を感じている。まだまだ経験の浅い若輩者の、しかも中間報告である。しかし、これも高校サッカーの現場の一つである。夢を描いて仲間と歩んできた「DUO（デュオ）リーグ」の５年間を中心にたっぷりと報告したい。「高校サッカーを考える」際のたたき台の一つとして活かしていただければ幸いである。

■地域におけるユースサッカーリーグ「DUOリーグ」の実践

Ⅰ．DUO リーグの理念

1．これまでのスポーツからこれからのスポーツへ

「ユース年代にリーグ戦を」との考えは、従来の学校運動部への反省から生まれている。それは、“本来のスポーツを取り戻す”ことであり“様々な規制からの解放”でもある。“チーム”と“選手”しか育ててこなかったこれまでの日本のスポーツ界にあって、“クラブ”と“プレーヤー”を育てる視点を持ち込む試みである。

スポーツ観を、「これまでの」ものから「これからの」ものへと変えていきたい（図 1 参照）。しかし、“意識 (考え方)”はそうたやすく変えられるものではない。変えられたとしても、日常的な“習慣”を変え

これまでのスポーツ観		これからのスポーツ観
チーム	→	クラブ
選　手	→	プレーヤー
多くの「補欠」を生むシステム	→	「補欠ゼロ」のスポーツシステム
「競技」志向	→	「プレイ-スポーツ-競技」多様なあり方
「大会」中心	→	「日常生活」中心
トーナメント	→	リーグ
「引退」のあるスポーツライフ	→	「引退なし」の生涯スポーツライフ
単一種目を年中行う	→	複数種目をシーズンごとに行う
「する」のみのスポーツライフ	→	「する・みる・語る・ささえる」多様なスポーツ
単一の価値観に集約するシステム	→	多様な価値観を認め受容するシステム
学 校・企 業	→	地　域

図1. これまでのスポーツからこれからのスポーツへ
～このような方向性で、“スポーツ”を、スポーツの“場”を、そしてスポーツ好きな“人”を育てていくことが大切なのではないか～

なくてはすぐに元に戻ってしまうだろう。リーグシステムは、これまでの“習慣”を変え、生活に根ざした文化としてのスポーツを育てるための仕掛けなのである。

2．DUO リーグの理念

定着させたい“意識”と“習慣”を、「DUO リーグの理念」としてまとめた（資料参照）。目新しい考え方でも何もない。ちょっと考えれば当たり前のことである。ただし、これまでの習慣にとらわれているうちに見失っていた部分もあるかもしれない。

1）サッカーの生活化

「最後の大会が終わって引退する」のは、どこかに無理があるからである。週末に定期的にゲームがあるリーグシステムは、運動・栄養・休養のサイクルの中に、高校生としての日常生活 (学習を含む) とスポーツ活動をバランスよく配置する上で好都合である。

年間の活動サイクルの確立にもリーグシステムはすぐれている。試合に負けて急にオフになることはない。リーグ期間中がシーズンである。シーズンオフを有効利用することで、より豊かなスポーツライフを満喫できるだろう。

2）定期的な試合の場の確保

「サッカーをする」とは、「サッカーのゲームを行う」ことである。一つのクラブの中に、レベルやニーズを共有するチームがいくつかあるような集団であれば、皆がゲームを行うことが可能である。その集団においてはチームワークだけでなく、異なる価値観を受け入れるクラブワークが求められる。ゲームを行う単位である“チーム”とスポーツを育てる場である“クラブ”は整理して考えなければならない（図 2 参照）。

定期的なゲームはトレーニングの動機づけとなる。ゲームだけ、トレーニングだけでなく、両者がバランスよく配置されていることが大切である。定期的にゲームがあるリーグシステムは、この点からも有効である。また、負けたら終わりのノックアウトシステムにはどうしても悲壮観がともなう。アマチュアにもかかわらず“引退”という言葉がはびこる現状の誘因となっている。負けても次があるリーグシステムにおいてグッドルーザーが育ち、前向きなスポーツ観が育つのである。

ＤＵＯリーグの理念

1.「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ－サッカーの生活化

- 日常生活にサッカーが無理なく位置づけられる
  - 運動・栄養・休養のバランス
  - 学習活動等との「両立」
  - → 歯磨き感覚のスポーツライフ
- シーズンが明確になる
  - シーズンオフをつくる → シーズンを意識した計画づくり
  - 複数のスポーツへの取り組みが可能 → スポーツのシーズン制
- 3年間の高校生活にサッカーが無理なく位置づけられる
  - アマチュアに引退なし

2.「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成－チームからクラブへ

- 誰もがゲームに参加できる
  - 「補欠ゼロ」のサッカー環境
  - 複数のチームによって構成されるゆたかな“クラブ”の育成
- 練習への動機づけとなる
  - M－T－Mの活動サイクルの樹立
  - 合理的・科学的トレーニング
- 「リーグ戦」が経験できる
  - 負けても次がある → 積極的なスポーツ観を育む

3. 強いチームとたくましい個の育成－レベルアップ

- 同程度の相手と切磋琢磨できる
  - レベルアップ
  - タレントの発掘と育成
  - 勝つか負けるかわからない「ハラハラ」を楽しむ
- レベルやニーズに合わせた活動ができる
  - 昇格・降格による動機付け → 強い“チーム”の育成
  - 能力に応じた活動の場の提供 → 自立したたくましい“個”の育成

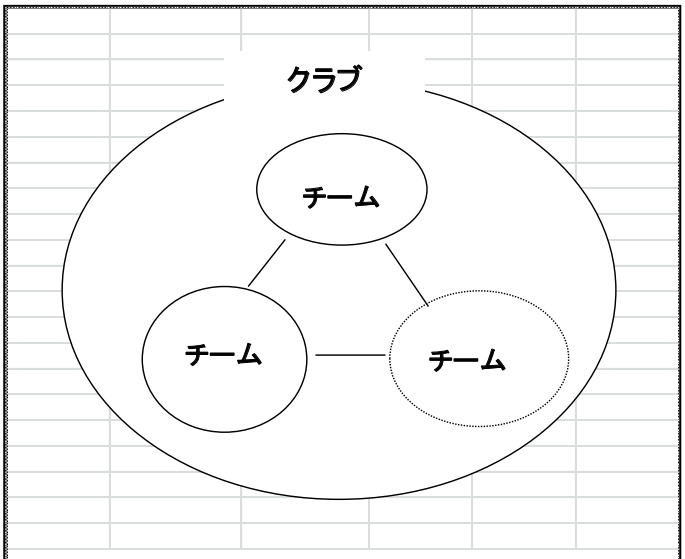
4. サッカーをささえる人材の育成－自主運営と受益者負担

- 「スポーツの主人公」を育てる
  - ただサービスを待つのでなく、自分でできることはする
  - 受益者負担の原則
- ピッチを取り巻く多様な人材を育てる
  - 審判員の育成と地位向上
  - 現場スタッフ、ボランティア、サポーター等の多様な人材の発掘と育成

草の根から全国へ　サッカーからあらゆるスポーツへ

サッカーを通して健全なスポーツ観を身につけ、ゆたかなスポーツ環境を構築する

注）2004年度から「DUOリーグの理念」は上記のものとなった（本文と表現が多少異なるが趣旨は変わらず）



これまでの学校運動部は、ゲームを行う単位である「チーム」（競技志向のチームがほとんどで、プレイ志向の受け皿にはなりにくい）に偏重していた。

しかも単年度のチーム、最後の大会が終わると引退という仕組みになっており、プレイの機会が限られていた。「クラブ」が育ちにくい環境にあったと言える。

本来育てるべきは、多様なニーズを受け入れる「クラブ」ではないか。

複数のチーム（レベル、ニーズ、年齢、性別、種目など多様）で構成されているクラブのイメージを持つことが必要

図2.「チーム」と「クラブ」の関係

3) レベルに応じた受け皿づくり

ノックアウトシステムでは時折ミスマッチが起きるが、同レベルのリーグシステムなら毎試合緊張感があり、ハラハラする楽しさを味わうことができる。もちろん切磋琢磨する中でレベルアップを図ることもできる。レベルやニーズごとに階層的にリーグがある仕組みを完成させることが必要である。

タレント発掘の観点からは、リーグ単位での発掘・育成が効果的である。リーグ単位での合同練習、トレセン活動によって、強化と直結した活動となる。

4) サッカーをささえる人材の育成

選手育成、代表強化の観点だけでなく、社会全体が豊かになるような文化としてのスポーツを育てるために、スポーツをささえる人材の育成が急務である。選手中心のこれまでの学校運動部では競技者を育てることに力点が置かれていたが、ユース年代の大多数のプレーヤーは、競技場に足を運び、審判や運営に携わり、次世代の親や指導者となって、スポーツをささえる側となるのである。ささえる活動の意義を理解させる指導がユース年代には欠かせない。

ゲームを行うために何が必要かを自分で考えて行動できる“スポーツの主人公”を育てたい。サービスをただ待つのでなく、自分でできることはする、自立したスポーツマンの育成である。

と同時に、スポーツを取り巻くさまざまな分野の“スペシャリスト”を育てることも大切である。受益者負担の原則に基づき参加費を徴収し、為された仕事に対して正当に評価することによって、スポーツをささえる仕事の価値が高まり人材が育つのである。リーグシステムは、サッカーを、そしてスポーツをささえる人材の育成にも好都合である。

Ⅱ．DUO リーグの誕生

上に挙げたような理念が具体化したのは、多くの仲間との語らいの中からである。東京都高体連の有志で「サッカー科学研究会」を発足させたのは 1995 年度のことであった。グラウンド上の指導と大会運営だけでなく、もっと互いに情報交換できないかということがきっかけであった。はじめは「科学的トレーニングを現場にどうやって導入するか」がテーマだったが、トレーニングだけでなく栄養と休養を含めた「スポーツライフマネジメント」が次の話題となり、「高校生としての日常生活を全うしながらサッカーを続けていくには」「少しでもレベルを上げるには」「これからのスポーツを担う人材を育てるには」といった話の中でリーグシステムの話が時折出てくるようになった。96 年 2 月の「第 16 回サッカー医科学研究会」におけるシンポジウム、「育成期における望ましい競技会のあり方」で指定発言者として意見を述べる機会があり、当時考えていたことを整理することができた。DUO リーグはその 2 ヶ月後にはじまった。

理念が明確化すれば、あとはこれに賛同し、共に行動する“同志”を集めればよい。幸い私の周りには、東京教員クラブで共に汗を流した仲間や、高体連でいつもコミュニケーションを取りあっている仲間が大勢いた。青木久典（昭和一）、小金丸浩志（京華）の両氏はそういった仲間であり、彼らはすぐこの話に乗ってきた。青木氏からは「うちは 3 チーム均等につくって部の中で競争させます」とのアイデアも出された。実際に初年度の昭和一は、チームごとに主将と副将を置き、ユニフォームもそろえて単独チームとして活動していた。もちろん高体連の大会にはそれらの代表チームが出場する。リーグ戦とカップ戦への取り組みを整理した好事例であった。

筑波大学の先輩でもある栗原鏡成氏（都立向丘）は、グラウンドがないため練習試合の相手を探すのに毎週何時間も電話を握り締める毎日であった。リーグの一員となって定期的に試合が組まれるようになれば、その労力も軽減するだろうとお誘いしたのだが、最初は「グランドがないから迷惑をかけるだけだ」と遠慮されていた。“ささえる”ことの重みを充分承知されていたからである。しかし構想自体には大いに賛同し、結局は初年度からの仲間になった。栗原氏が東京学芸大学附属高校に異動した後も、OB が来てこの活動をささえてくれている。これには、学校の中に「DUO リーグ顧問（DUO リーグの試合のみの担当者)」というポストを作るのにご尽力下さった、栗原氏の後任顧問の力添えも大きい。

どうしても入ってほしかったのが、当時東京都高体連委員長だった上野二三一氏（都立小石川）である。いずれは全国の委員長になられる上野氏には熱っぽくこのアイデアを語った覚えがある。今やリーグ構想の最大の理解者でもある上野氏は、「DUO リーグ」の名付け親でもある。それは、巣鴨のビアホールで生まれた名称であり、東京都高体連の第 2 地区が母体であることに由来する。

JCY（日本クラブユースサッカー連盟）との関係も保ちたかった。同じユース年代をみている仲間である。一線を引く理由はどこにもない。私自身が JFA 科学研究委員会の調査のため、河口湖で行われている

JCY の全国大会（今は J ヴィレッジに移った）に毎年のように出入りしており、当時の JCY 事務局長であった三菱養和の西子実氏とは早い段階でリーグ構想の話をしていた。ユースチーム監督の漆間信吾氏とも意気投合し、快く仲間入りしてくれたのは言うまでもない。

こうして 5 つのクラブから 10 チームが参加して、初年度の前期 DUO リーグが始まった。1 節につき 5 試合、すなわち 1 日グラウンドが確保できれば 1 節消化できる。全部で 9 節なので、各チームが 1 度だけグラウンド確保に力を尽くせばできるという計算ではじめたが、実際はグラウンドを持っている筑波大附属高校と小石川高校でやりくりをした。中間考査のシーズンは都合が合わず、試合が消化できないことがあったが、当該チーム同士で連絡を取り合って消化してもらった。グラウンド確保とスケジュールの調整は大きな課題であるが、近郊でリーグを組織しているため、平日の放課後でも試合が可能であったことが、日程の消化には好都合であった。初代王者は京華高校。優秀審判賞には 2 名の高校生が選ばれた。初年度から、審判もできるだけ高校生にさせるようにしている。審判で能力を発揮する者も生まれてくるだろうとの思いからである。

三菱養和も小石川も 2 年生中心、昭和一は 3 チーム均等割りといった顔ぶれだった第 1 回のリーグに、筑波大附属高校は 3 年生中心の筑波 A と 1,2 年生主体の筑波 B で参加した。「筑波 A 対筑波 B」のダービーマッチは、互いの意地がぶつかり合う好ゲームだった。

Ⅲ．DUO リーグのあゆみ

その後は、試行錯誤を繰り返しながら一歩ずつ前進し、無事 5 年目のシーズンを終えることができた。

ここでは 5 年間の成果をいくつかのポイントに絞って述べてみたい。

1．DUO クラブの増加－“同志”の輪の広がり

この 5 年間で加盟クラブは倍増した。指導者が理念を共有し、「文京区と豊島区にある」クラブであれば基本的にウェルカムである。理念を共有する“同志”が年々増えていることが大きな成果である。

初年度後期からは学習院（鈴木勇作氏。現在は玉生謙介氏）と豊南（小林厚氏）が、2 年目のシーズンからは本郷（阿出川信夫氏）が加盟した。リーグの一員となると、シーズン中はリーグ日程に拘束される。全国区の強豪である本郷高校は独自のスケジュールで動いているだろうと気を使い、初年度はお声かけをしなかったのだが、2 年目に加盟以来、DUO リーグの理念の具現化に努力してもらっている。

理念を共有することは非常に大切である。理念が共有できていれば、誰もが“ささえる”ことに前向きに取り組んでくれるので、加盟クラブが増えると同時にスタッフも増え、運営はむしろスムーズにいく。「リーグ入りすれば試合ができてラッキー」という安易な感覚で入ってこられても何も生まれない。リーグの当事者としての自覚を持ち、権利を主張する前に義務を果たす“同志”によって運営されるのである。新規加入に際しては、チェアマンのヒアリング（要するに私がいろいろ話を聞くこと）を経て、その上で「DUO 会議」で承認手続きを取るようにしている。

2001 年度からはさらに 2 つのクラブが仲間入りする。巣鴨高校の顧問からは、「最近は、自分たちでは何もせずに、ただグランドへ行けばサッカーができると思っている高校生が多い。DUO リーグは試合を行うだけでなく、ささえる活動も重視していると聞いた。ぜひ参加させていただきたい」という話があり、全会一致で承認された。もう一つは、東京大学ア式蹴球部。ユースリーグの定義からは外れるが、B チームの活動の場として大学生にメリットがあるし、大学生との試合経験や交流、都心の照明付き施設は DUO リーグにとってもプラスである。これも全会一致で承認された。私としては、東大生がいずれ日本の各界のリーダーになる人材であるとするなら、DUO リーグの理念と活動に触れておいてもらうことは、スポーツの理解者を増やす上で重要との読みもあった。赤門をくぐることが高校生にとっての知的刺激（あるいは話しのネタ）となるのもいいし、“東大神話”がいい意味で崩壊してくれればなお良いとも思う。

東大コーチの高崎康嗣氏は、大学院時代に私がみていた少年サッカーの教え子である。また、彼のもとでプレーする東大サッカー部員には、高校時代に DUO リーグを経験した筑波大学附属高校の OB がいる。彼らが再び DUO リーグに戻ってくるめぐりあわせがおもしろいと感じたが、“B チーム”が参加する DUO リーグには決して戻るまいというのが、彼らにとっての今シーズンの目標のはずである。

DUO リーグをモデルにして、各地にリーグが生まれていることも、“同志”の輪の広がりと言えよう。筑波大学附属駒場高校の小沢治夫氏は、世田谷区で「S リーグ」を立ち上げ 5 年が経過する。足立学園の

遠藤宏一氏も理念に賛同する“同志”であるが、「足立区はだめ。やりたかったら自分たちで作りなさい」と突っぱねていたところ、99 年度から足立区周辺でのリーグが誕生した。「セリエＡ（ぁ）だち」という名前までもこちらで用意していたのだが、彼らは自分たちのリーグを「Ａリーグ」と呼んでいる。

２．リーグ構成単位（会員）の明確化

リーグの構成単位（会員）も整理されてきた。どういう単位で登録（加盟・加入）するのかは、リーグが何を育てるのかといった基本的な理念と連動している（図３参照）。

育てたいのは、多様なレベルやニーズの受け皿としての“クラブ”であり、その構成員としての自立した“プレーヤー”である。従って、DUO リーグの構成単位は、加盟団体は“クラブ”、会員は個々の“プレーヤー”となる。彼らは基本的には“会費”を払ってメンバーとなり、リーグの構成員としての責任を果たすことによって、リーグ戦に参加する“チーム”を組織する権利が与えられる。ギブアンドテイクの関係がベースである。

DUO リーグでは、加盟クラブを「DUO クラブ」と呼んでいる。この単位で“会費”を徴収することも検討されたが、現時点では見合わせている。今後の課題である。

各 DUO クラブのプレーヤーを「DUO リーガー」と呼ぶ。2000 年度からは年 500 円の“会費”を払って DUO リーガーとなる制度が取り入れられた。DUO リーガーには「DUO リーグプログラム」が無料で配布される。一般の方には「DUO リーグプログラム」は一部 400 円で販売されているので、前後期分が無料で入手できることは金銭面でお得である（来シーズンはプログラムをもう少し安く上げよう））。

ゲームを行う単位である“チーム”は各期ごとにエントリー（参加申込）する。エントリーに際して各チームからは 18,000 円の“参加費”を徴収する。2 チーム参加するクラブからは 2 チーム分徴収する。チームに課せられた義務は全て、試合を行うための義務である。参加費を払うこと、大人が必ず付添うこと、審判を確保すること、指定された試合を必ず行うこと。これらが各チームの義務である。

“メンバーシップ”と“大会へのエントリー”を整理し、“会費”と“参加費”を区別することが大切である。それは“クラブ”と“チーム”を整理することでもある。ここでの考え方は、21 世紀の競技団体のあり方の提案でもある。

なお、DUO リーグでは、各試合につき 3 名までの“特別枠選手”（19 歳以上のプレーヤー）の出場を認めている。オリンピックを参考にしているのは言うまでもない。このおかげで、私もプレーヤーとして出場することができる。実際は B チーム等でメンバーが足りない時などに OB が出場する際にこの枠を使うことが多い。“特別枠選手”は必ずしも「ＤＵＯリーガー」として入会していなくてもかまわないが、側面からささえる大切なスタッフである。

３．リーグシステムの確立

最初は 10 チームの 1 リーグ制であったが、加盟クラブ及び参加チーム数の増加とともに、リーグ形態も徐々に変化してきた。それは、同レベル同士が切磋琢磨できる環境を構築するための試行錯誤でもあった。

98 年前期の順位をもとにして、上位 8 チームが 1 部、それ以外は 2 部として、同年後期より 1,2 部制を導入した。たとえあるクラブの A チームであって

<table>
<tr><td colspan="2">＜エントリー＞</td><td></td><td>個人</td><td>個人</td><td></td><td colspan="4">チーム</td><td></td><td colspan="4">チーム</td></tr>
<tr><td>事業費</td><td>参加費</td><td></td><td>指導者講習会等</td><td>審判講習会</td><td></td><td colspan="4">前期リーグ</td><td></td><td colspan="4">後期リーグ</td></tr>
<tr><td></td><td></td><td>1月</td><td>2月</td><td>3月</td><td>4月</td><td>5月</td><td>6月</td><td>7月</td><td>8月</td><td>9月</td><td>10月</td><td>11月</td><td>12月</td></tr>
<tr><td colspan="2">＜メンバーシップ＞</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">管理費</td><td>個人</td><td colspan="3"></td><td colspan="4">前期リーグプログラム</td><td></td><td colspan="4">後期リーグプログラム</td></tr>
<tr><td>クラブ</td><td colspan="12">DUOクラブからの加盟費／賛助会員(スポンサー)からの会費</td></tr>
</table>

図３．メンバーシップとエントリーーDUOリーグの会計構造

注）各事業へは参加単位（リーグならチーム、講習会なら個人）ごとに「参加費」を払って「エントリー」する。それが「事業費」である。各事業は独立採算が原則。組織をささえるための「管理費」は、DUOリーガー（選手）からの「会費」やDUOクラブの「加盟費」、あるいは主旨に賛同する賛助会員からの「会費（スポンサー料）」から捻出される。このようなリーグ仲間の「メンバーシップ」が組織をささえる力になり、この部分をより一層強化したい（今後の課題）。

も力がなければ 2 部、逆に B チームであっても 1 部入りすることもある。入れ替えは前後期とも行い、1 部の下位 2 チームは自動降格、下から 3 番目のチームは入替戦と、なかなかシビアである。

リーグ期間の設定、すなわちシーズンはどこで、どこがオフシーズンとなるのかを明確にすることは重要である。大会スケジュールや学校のサイクルを考え合わせると、4 ～ 7 月、9 ～ 12 月をリーグ期間とし、1 ～ 3 月をオフシーズン、プレシーズンとする現行の考え方は一般化できるはずである。変化の幅の大きい高校生の場合、長期にわたるリーグ、例えば通年のリーグはなじまない。

この考えを前提とすると、一つのリーグは 8 チームで構成するのが望ましいということもわかってきた。行事や大会等の関係で、これ以上増えると日程の消化が困難である。最終的に目指すイメージである「衛星型サッカー環境」も、一つひとつのリーグは 8 チーム単位で考えている。

4．マネジメントシステムの確立

リーグ運営は、まず開幕前に各クラブから参加チーム数とスケジュール（学校行事と会場の都合）を提出してもらい、参加費を徴収し、前回リーグの順位をもとにリーグ構成と組み合わせの大枠を確定するところからはじまる。リーグ期間中はおおむね以下の流れで進められる。

1）日程の調整と連絡…会場・大会等の進行状況・各チーム事情等を考慮して次のゲームを最終決定し、「DUO リーグ通信」や「ではない通信」(緊急時の号外) で各クラブへ連絡する。

2）試合当日の運営…当日の朝はライン引き・会場づくり。定刻にゲームが行われるように運営。審判手当ての支払い。記録の管理。後片付け(特にごみ処理)。

3）試合結果の集計と報告…各会場の試合結果の取りまとめ（会場責任者から FAX で翌日届く）。順位・得点ランキング等を確認し、「DUO リーグ通信」で各クラブへ連絡。

注）ライン引きは 1 試合目のチームが、後片付けは最後のチームが行うこととしているので、会場校への負担は高体連の大会ほどはない。また、審判は割り当てに従って全クラブが等しく行う。高校生が笛を吹くことを奨励しているが、OB や保護者が行うこともあるし、もちろん指導者が吹くこともある。

注に挙げた以外の業務を全て、最初の 3 年間はチェアマン兼事務局長の私がやっていた。こう書くとかなり大変な感じもするが、慣れてくるとどうということはない。それこそ“習慣”である。

しかし、個人に全て寄りかかる組織では発展しないと考え、99 年度から徐々に仕事を振り分け、2000 年度からは、競技担当、広報担当、会計担当を設けて分担制にした。これら日常的業務に加えて、2000 年度はプログラム作成、フレッシュマンリーグ（前期のみの 1 年生リーグ）、審判講習会、ＤＵＯリーグ選抜などの新規事業にも、担当者を設けて取り組んだ。

“プロ意識を持ったボランティア”として、手作りでリーグを運営することがまずは基本である。その上で、いずれはマネジメントの部分を切り離すことも考えている。その部分を、例えば NPO 法人として独立させる、あるいは業者に外部委託するなど様々な方法が考えられる。しかしいずれの場合でも、“プロ意識を持ったボランティア”と“ボランティア精神を持ったプロ”の存在が不可欠だろう。

5．リーグ内の情報交換システムの確立

1）DUO リーグ通信

「DUO リーグ通信」を、シーズン中はほぼ毎週発行している（資料参照。全 4 ページの 1 ページ目）。ここには試合結果や各種データ、次週の連絡などの他に、「チェアマンからのメッセージ」も時々載せている。ここに資料として載せたものは、東京都ユースサッカーリーグ設立趣意書を提出したというニュースと、施設利用に際しての心構えに関する厳重注意が含まれている。こういったものを毎回 FAX で各クラブ代表者に送信し、代表者から「DUO リーガー」にわたるという仕組みである。連絡をめぐるトラブルもいくつかあったが、おおむねスムーズにいっているようである。

「DUO リーグ通信」をいちいち封筒に詰めて郵送するといった方法では続かなかっただろう。これには、一気に送信できる優れた FAX に助けられている。今後は電子メールやインターネットを用いて、デジタル情報化したものをどんどん交換できるようにしていきたい。

デジタル情報も重要だが、サッカーショップの掲示板にあるアナログ情報もなかなかのものである。「DUO リーグ通信」は、池袋の某サッカーショップにも配信しており、そこの掲示板には「セリエ A」の

2000.6.6.(中塚)

2000ＤＵＯリーグ通信　No.6

大会、試験、そして悪天候のため、しばらく試合が消化できませんでした。試合の連絡は「ではない通信」で行っていると思いますが、DUO リーグ通信は久しぶりです。

1 部は小石川勢の好調が目立ちます。このまま小石川Ａが 3 期連続の優勝を勝ち取るのか。6 月 11 日の小石川Ａvs 三菱養和戦に注目です。

2 部の方はいよいよ大詰め。UO リーグでは豊島学院Ａが全勝で 1 位を確定し、後期からの 1 部リーグへの昇格を決めました。おめでとうございます。UO リーグ 2 位が確定した豊南は、DU リーグ 2 位のチームとの、2 部 3 位決定戦にまわります。その DU リーグですが、京華Ａがリードしていますが、6 月 11 日の筑波大附 vs 城西Ａの試合で全て決まります。2 部の大きな山場です。

ところで、DUO リーグプログラムは届いたでしょうか。選手諸君は特に、「読み物」のところを是非読んで下さい。そして、「DUO リーガー」としての誇りと自覚を持って楽しんで下さい。

FAX を受信されたらすぐ、中塚携帯　　まで TEL して下さい

東京都ユースサッカーリーグ設立趣意書提出！

「2001 年度より東京都ユースサッカーリーグを創設すべく行動を開始する」ことが本年度の DUO リーグの活動方針です。そのため、プログラムの作成を始めとする DUO リーグそのものの整備を進めると同時に、政策決定機関でありかつ実施主体ともなる(であろう)(財)東京都サッカー協会(TFA)へのはたらきかけも必要です。

(財)日本サッカー協会(JFA)第 2 種検討委員長でもある小石川高校の上野二三一先生が、この件で TFA 安田一男会長に設立趣意書(DUO 関係者には後日お送りします)を提出したのが 6 月 5 日(月)。8 日(木)の総務委員会での検討を経て 20 日(火)の理事会で承認されれば、TFA 第 2 種委員会においてユースサッカーリーグを検討する部署が設置され、具体化へ踏み出すことになるでしょう。なお、参考資料として DUO リーグプログラムを 30 部、TFA に寄贈しました。

DUO リーグの皆様はこの成り行きを「当事者」として見つめていただくとともに、DUO リーグが先行事例としてよいモデルとなるよう、さらに質を高め、些細なことにも改善に取り組んで下さい。特に、次に挙げるようなことについては各クラブ、そして個々が充分自覚して臨んで下さい。

チェアマンからの厳重注意！

DUO リーグの理念とその活動を今後も継続し、広げていくためには多くの方の理解が必要です。特に施設の利用に関して、学校関係者の理解は不可欠です。「立入禁止」「ボール使用禁止」「スパイク禁止」「更衣・トイレは指定された場所を使用する」「ゴミは持ち帰る」など、各会場ごとの約束事を守らないと、DUO リーグそのものの運営ができなくなります。

6 月 4 日の筑波会場では、体育館で女子バレーボールの練習試合が行われていました。DUO の試合を終えたある「DUO リーガー」が、バレーボールを見ようと正面玄関から体育館内に入りました。土足のままで…。5 月にも同じことがありました…。体育館の管理をされている先生からは、「これはもう個人の問題じゃないよ。こんなんじゃあサッカーで学校を使ってほしくないよ！」とまで言われています。

体育館に入る場合、入り口で靴を履きかえる。子供でも知っている常識です。にもかかわらず、土足で上がってしまった行為は、もはや一個人が叱られ、反省して終わるという性質のものではありま

最新情報の隣に「DUO リーグ」の最新情報が掲示されている。池袋駅を使うことの多い「DUO リーガー」たちは、バティの隣に自分の名前が出ている「DUO リーグ通信」をみて、またモチベーションが高まるのである。ついでながら、進路選択に迷っている地元の中学生にとっては、サッカーができる高校を判断する際の資料の一つとしても機能しているようである。

情報のあるところにはコミュニティが生まれ、ネットワークが生まれる。サッカーショップ等の小売店の情報発信機能は、インターネットの時代にあっても重視すべきである。

2）DUO リーグプログラム

2000 年度にはじめて作ったプログラムは、DUO リーガーがお互いのことをさらに理解するための資料であり、DUO リーグそのものを理解する、すなわちこのリーグが何のためにつくられ、どこへ向かおうとしているのかを知るための資料である。単なるチーム紹介だけでなく、JFAnews の連載等の読み物がいくつかあり、なかなか読み応えのあるものができたと、担当の奈蔵清之氏（豊島学院）ともども自画自賛している。前期プログラムの残部を 1 部 400 円で販売中なので、ご希望の際は連絡いただきたい。なお、後期プログラムはすでに完売した。

2001 年度のプログラム作成には、生徒も参加する。具体的には、豊島学院と筑波大附属の女子マネージャーで取材班を編成して小石川や三菱養和を取材したものを掲載することを企画中である。生徒はかなり乗り気である。このように、高校生が取材や編集に携わることにより、「勝った負けた」だけでない、多様なサッカーとの関わりが可能となる。「プログラム」という一つのアウトプットができたことにより、また一つ世界が開けてきたように思う。

６．リーグ外への情報発信

ＤＵＯリーグの実践については、これまでもいろんなところで報告する機会があった。92 ～ 96 年の『高校サッカー年鑑』で連載していた「プロリーグの発足と高校サッカーの将来」の中で示唆したリーグ構想は、その後 JFAnews の連載「ユース年代のサッカーはいま」で紹介することになる（No.164・165、1997.1・2)。神奈川県立体育センター主催の「部活動指導者セミナー」や、JFA 科学研究委員会主催の「科学的トレーニングの理論と実際研修会」でも紹介する機会を得たし、日体協Ｃ級指導者養成講習会の共通科目「スポーツ社会学」の中でも一部分紹介している。これらを通して“同志”の輪が広がっていくことがうれしい。

学会関係でも何度か発表する機会があった。98 年の「スポーツ産業学会第 7 回大会」では、理念に裏打ちされた現場の実践報告ということで大きな反響があった。有志の研究・情報ネットワーク「サロン 2002」では、様々な分野の方にこの試みを伝えることができ、理解と支援、及びいくつかのアイデアを頂戴した。さらに、お隣の韓国へも、99 年 11 月の韓国体育学会主催のシンポジウム「2002 年ワールドカップと生涯スポーツの振興」において、「日本サッカーの構造改革」の話（もちろん日本語で）の中で一部紹介することができた。日本以上に「これまでのスポーツ観」に偏っている韓国でも、スポーツ観及び習慣を変えることが必要であると、多くの識者は認識しているようだった。私の発表に韓国の研究者も共感するところが多かったらしく、言葉の壁はあったが、その日

は遅くまで、韓国のお酒を飲みながらいろいろ語り合うことができた。もっとも、研究者と現場がどれほどリンクしているのかは、日本同様未知数であるが…。

このように、DUO リーグを外向けに発信する機会はますます増えている。前項に述べた「DUO リーグプログラム」も、DUO リーガーへの啓蒙だけでなく、外部への情報発信の意図もある。今後もいろんなメディアを通して情報発信していきたい。

7．DUO リーグ会議の定期的開催

当初から「指導者会議」と称しては定期的に会合を開き、その中で課題を出し合いながら方向性を確認していたのだが、それが「DUO リーグ会議」の名称で、本格的な会議の形態を取るようになったのは初年度後期からである。ものごとを決断する際の手続きは重要である。より多くの、異なる立場からの意見を取りいれながら民主的に判断できる組織であるために、「DUO リーグ会議」では一般の方にもオブザーバーとして参加してもらっている。オブザーバーに裁決権はないが発言権はある。これまでに、都内や他県の指導者、JFA・J リーグ関係者などが出席し、前向きな意見を出していただき、大変感謝している。

会議そのものがリーグ運営の当事者としての自覚を育てるとともに、組織内での合意形成のトレーニングでもある。「民主主義のトレーニング」と言っても良いだろう。「DUO リーグ会議」では若手指導者が交代で議長を経験することによって、ささえる人材の育成の場ともなっている。会議後の飲み会では必ず議事進行の話題も出て、それがまた議長を経験した者の勉強となるのである。

1999 年度後期 DUO リーグ会議の席で、早川幸治氏（豊島学院）から「生徒にも DUO リーグ会議に参加させ、リーグの存在を意識させる」提案があり、その次の会議からはオブザーバーとして高校生も参加するようになった。彼らははじめ、先生方が並ぶ本格的な会議にびびりまくっているのだが、そのうち恐ろしいものではないことがわかり、また自分たちの発言を聞いてくれることがわかると喜んで意見を言うようになる（最後までなじまない者もいるが）。2000 年度後期の優秀審判賞選出には、高校生からの意見が大いに反映された。これだけでなく、高校生からの生の意見は非常に参考になる。今後とも続けていきたい。

8．レベルアップ

これら制度的な充実とともに、肝心のサッカーの質の方も、着実に向上していると思う。DUO リーグは、各クラブのレベルアップに直接または間接的に貢献したと言えるだろう。

DUO リーグができる前と後を比較すると、特に補欠でしかなかった者のモチベーションが高まり、全体的な底上げが為されたということが言える。例えば名門本郷の復活は、単に推薦でいい選手が入ってくるようになっただけではなく、A も B もともに 1 部に属して 40 分ハーフの厳しいゲームを経験できたことが部内の底上げ、競争の激化につながったことが一因だろう。同じく AB ともに 1 部に属していた小石川は本年度、あと 2 勝で高校選手権本大会出場というところまでたどり着いた。3 年生全員が前期 DUO リーグの最後（7 月末）まで残ったことがプラスに働いたこともあるのではないか。JCY では三菱養和が関東予選を勝ち抜いて、年末の J リーグユース選手権に出場した。JCY とは一味違う高体連のサッカーと接することで、彼らが一回り大きくなったことを感じる。

このような他クラブの活躍がいい意味で互いに刺激になっている。リーグ仲間は良きライバルでもある。高体連もクラブユースも関係ない。

今後は更に、DUO リーグの上位に位置するリーグを、底辺から順に組織していきたい。最終的には関東リーグあたりまでつながっていくと良いのではないか。関東スーパーリーグの方々ともこの件で一度じっくり話し合ってみたい。

Ⅳ．ＤＵＯリーグのビジョン

本年度は、「2001 年より東京都ユースサッカーリーグを創設すべく行動を開始する」ことをモットーに様々な試みに挑戦した。前述の、プログラム作成、フレッシュマンリーグ、審判講習会、DUO リーグ選抜の活動などの新しい試みはすべて、リーグの質を高めるためのものであった。そして、業務の統合と分担を進めたのは、このリーグを特殊な事例としてでなく、汎用性の高いものにするためであった。このような内的な整備と並行して、上野二三一氏を発起人代表として「東京都ユースサッカーリーグ設立趣意書」が（財）東京都サッカー協会に提出され、同理事会で承認されたのは 6 月のことであった。

しかしその後はなかなか話が進まない。ある面で仕方のないことだと思う。東京協会第 2 種委員会の構成員は皆、現場での日々の指導に一所懸命汗を流しておられる方々である。全体的な検討をするだけの余裕を生み出すのはなかなか困難である。だからといって

図４　衛星型サッカー環境試案　JFAnews No.165　1998年3月号
「ユース年代のサッカーはいま！」
最終回「これからのユースサッカー」

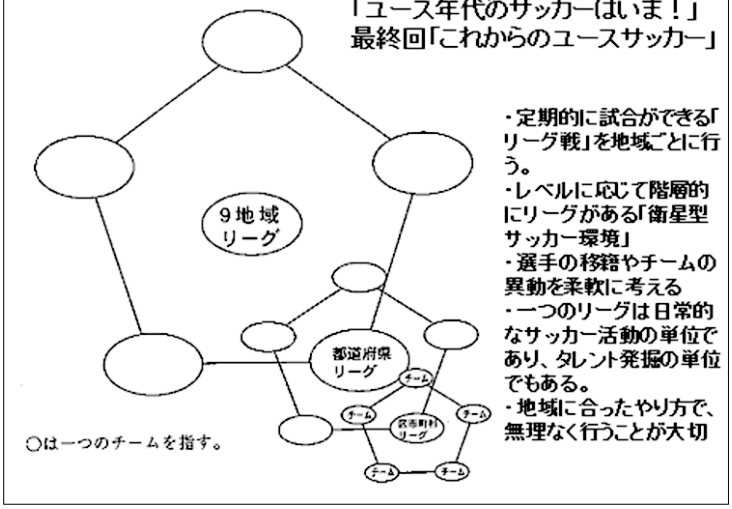


図５　イベントシステムの例（ユース年代）

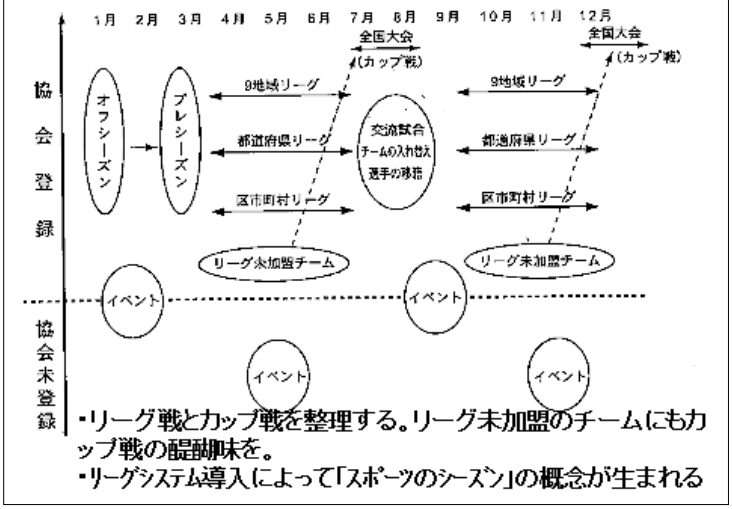
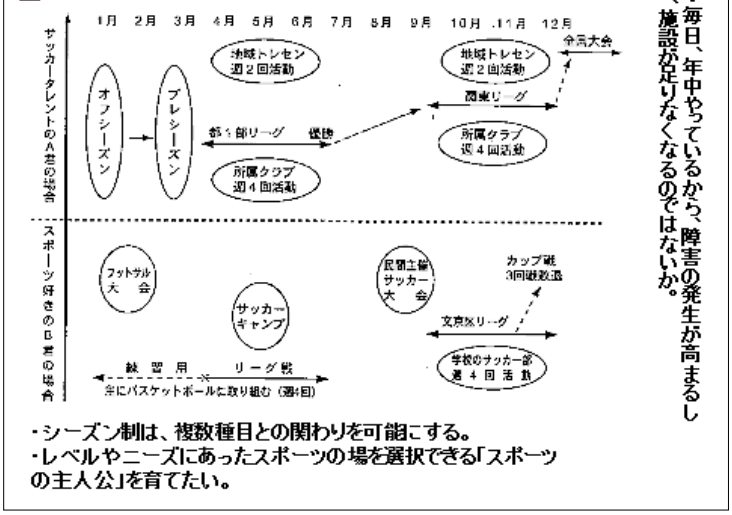


図６　個人のスポーツライフの例（ユース年代）



「協会がやってくれる」のを待っていても仕方がない。底辺からの働きかけを積極的に進めていくことが必要であると感じている。

その際、将来的なビジョンを提示することは重要である。最終的にどこへ行き着くのかが明確でないと、最初の一歩はなかなか踏み出せない。以下に述べるのは、最終的な仕上がりイメージである。ここにたどり着くまでに、現実との擦り合わせや、社会の変化への対応が迫られるだろう。多くの人や組織との連携は不可欠だが、小さなこだわりは不要である。多くの声に耳を傾け、柔軟に修正し、譲れない部分を守りながらつくり上げていく必要がある。

１．衛星型サッカー環境の構築（図４参照）

草の根のサッカーレベルからトップレベルまで、区市町村単位から９地域単位まで、レベルに応じたリーグが階層的に存在する「衛星型サッカー環境」の構築が、求められるイメージである。レベルが上がるにつれてより広い範囲を網羅するもので、レベルに応じた“チーム”の入れ替え制度だけでなく、“プレーヤー”も、自分にあった場を求めて移動＝移籍できる仕組みがユース年代からできればよいと考える。すなわち下位リーグのチームに所属する選手であっても能力の高い者は、より上位リーグのチームでプレーできるような仕組みであり、短期間の移籍も含めて検討の余地があろう。もちろんそのためには、チーム間で勝敗を競い合うだけのスポーツ観から脱却し、自立した個人と、個を育てる指導者と、互いを認めあい、受け入れあう成熟した集団の存在が必要である。

リーグの単位がタレント発掘の単位でもある。リーグ単位の合同練習会、選抜チームの活動が、そのままトレセン活動につながるような仕組みが考えられる。

２．年間スケジュールの確立（図５参照）

スケジュールの調整は目先の問題としてでなく、現行の大会を整理し、ユース年代の年間計画そのものを見直す作業につなげていく必要がある。図５は、リーグ戦を柱に据えたユース年代のイベントシステムの例である。レベルごとのリーグ戦が前期・後期と行われ、その合間に、リーグ未加盟チームも参加できるカップ戦（ノックアウトシステ

ムによるトーナメント) がある。さらに、協会未登録層を含んだ各種イベント (フットサル大会やサッカーキャンプなど) が年間を通して行われている。このように多様なイベントに関わることによって、ユース年代のスポーツ観もより豊かなものに育っていくだろう。

3．他種目を含めたスポーツのシーズン制（図６参照）

まずはサッカーのリーグ戦からはじめているが、他の種目でもこのような考え方でリーグが構成されれば良い。スポーツのシーズンが明確になれば、ユース年代のスポーツ環境は大きく様変わりするだろう。ユース年代のプレーヤーのほとんどは、単一種目にしか取り組めないような制度、あるいは意識・習慣にあるが、シーズン制を導入することによって複数種目への取り組みが可能となる。図６は個人のスポーツライフの例を示したものであるが、このように、レベルやニーズに応じて、シーズンごとに種目間を行き来できるような仕組みが考えられる。これらを可能にするためには、指導者やプレーヤー自身の意識改革が前提となるが、大部分の「スポーツ好き」にとっては、サッカーもバスケットボールもスキーもできるようなスポーツのシーズン制の導入は肯定的に受け入れられるだろう。

複数種目に関わることによって、各種目の競技人口は増加するし、本当に自分にあった種目を見いだすことも可能である。それは、真のタレントの発掘にもつながる。また、種目間の垣根の高い日本のスポーツ行政の改革も、ユース年代から複数種目に関わるマルチスポーツライフを経験することによって自ずと解消されてこよう。ユース年代が変われば日本のスポーツは変わるはずである。

4．地域に根ざしたスポーツクラブへ

DUO リーグの会場となることの多い筑波大学附属高校グラウンドには、リーグ戦をはじめとする大会実施日になると他校の卒業生も沢山やってきて、高校時代を懐かしむ姿をよく見かける。彼等にとってこのグラウンドは、高校時代の思い出の詰まったふるさとなのである。この意識が、例えばクラブハウスというハードに吸収できればと考える。

「DUO リーグ」はユース年代のリーグだが、第１種のトップチーム－「FCDUO（仮称）」－を持つことによって、次の段階に入るだろう。DUO リーグは「FCDUO(仮称) のユースチームがリーグ戦を行っている」という位置づけになる。先に活動から始まるクラブづくり。学校もクラブも関係なく、地域に根ざした総合型のクラブづくりは、このような形からも可能であると考える。

もっともこの話は、まだ私の頭の中で描いているだけである。実際は、個々の運動部の歴史や、OB を含めた組織との関係があって、そうすべきかどうかもわからない。むしろ各学校単位でクラブ化を図る方がより現実的な選択とも言える。ただ、欧米のクラブの歴史を見ても、“チーム”から始まって“クラブ”に成長し、何かをきっかけに他のクラブと統合したり分かれたりすることはよくあるのである。「ユナイテッド構想」ともいえる、複数クラブの連合による総合型のクラブづくりは、挑戦してみる価値があるのではないかと考えている。

その後の動向

1．DUO リーグのその後

・1996 年度より始まった DUO リーグは 2005 年度末に 10 周年を迎え、記念シンポジウムを開いた。その際「20 周年の時にまだ中塚がチェアマンをやっているようではアカン」と明言したが、19 年経過した 2014 年度をもってようやくチェアマン交代。いまは本郷高校の岩野英明氏が 2 代目チェアマンを務める。

・2018 年度は 34 クラブが加盟し、1 部 10 チーム、2 部 9 チーム × 2、3 部 8 チーム × 2 で構成。4 ～ 8 月は昇降格のあるリーグ戦を、9 ～ 12 月はより自由度の高い「フレキシブルリーグ」や、8 人制のワンデー大会などの「フリーサイズフットボール」を行った。前期リーグ日程のずれ込みと、後期の“遊び”が定着しないことがここ数年の課題。

・上位リーグつながったあたりから指導者の“遊び心”が失われてきた。そこで 2007 年度、「トロフィーがない！」プロジェクトに、アーティストと連携して取り組み、「履けなくなったサッカーシューズでできた履けるトロフィー」が完成。12 年間はこのユニークなトロフィーを用いることとなった。

2．ユースサッカーリーグのその後

・公開シンポジウムで述べたとおり、DUO リーグの理念と活動は徐々に広がり、2004 年度から大々的に「東京都ユースサッカーリーグ」を開始すべく、総会まで開いて準備は整った。しかし学校教育とスポーツの論理の間で調整がつかず中止に。その一方、JFA 主導のリーグ整備は頂点から進み、いまでは全国各地にユースサッカーリーグが整備されている。しかし学校教育とスポーツの論理の間の溝が埋まったわけではない。持続可能なリーグ環境をいかに整えるかが課題。

3．NPO 法人サロン 2002 と DUO リーグの関わり

・中塚チェアマン時代から、サロン 2002 関係者は DUO リーグにさまざまな形で深く関わってきた。また DUO リーガーを経てサロン 2002 に関わるようになった者も大勢いる。NPO サロンの岸卓巨事務局長もその一人。高校時代から DUO リーグの運営をサポートし、大学時代は DUO リーグ事務局として、そしていまでは NPO サロンの事務局長として DUO リーグの運営にも携わる。

・2015 年度より、DUO リーグの事務局業務を NPO サロンが受託することとなった。同時に「企画部」の業務も請け負うこととなり、テーピング講習会や栄養講習会を NPO サロンが企画している。ただしこれらは本来、リーグの構成員が企画すべきもの。ここにも“遊び心”の欠如、余裕のなさがみられる。

・「トロフィーがないプロジェクト」は、アーティスト名「KOSUGE1-16」の土谷享氏、「靴朗堂本店」の佐藤いちろう氏との連携で始まった。いずれもサロン 2002 のメンバーであり、いまでは「スキンプロジェクト」または「リサイクルプロジェクト」の名で展開。“遊び心”あふれる取り組みである。

4．NPO サロンとユースリーグ－U-18 フットサルを中心に

・サロン 2002 にはフットサルに関わるメンバーも数多い。とくに U-18 年代のフットサルには中塚および本多克己副理事長がさまざまな形で関わり続けてきた。NPO 法人サロン 2002 では 2016 年度より toto の助成を受けて「U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップ」を主催。全国各地域のリーグチャンピオンが集い「レベルアップ」を図るとともに、「日常的なリーグ環境の整備」を目標に掲げている。サッカーで展開してきたことを次はフットサルで実現させ、「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」に貢献していきたいと考える。

※次ページの「リーグ戦は最高の“あそび” －第 3 回大会を終えて」は、リーグ戦の意味について投げかけたものである。次々ページの「第 14 回合同研究会のテーマ＜“遊び心”を育む＞について」は、ここで再三述べてきた“遊び心”について述べたものである。

文責：中塚義実（特定非営利活動法人サロン 2002 理事長）

ユース年代にリーグ戦を②

リーグ戦は最高の“あそび”
ー第3回大会を終えて

第３回　U-18 ﾌｯﾄｻﾙﾘｰｸﾞ ﾁｬﾝﾋﾟｵﾝｽﾞ ｶｯﾌﾟ 報告書」より転載
主催：特定非営利活動法人サロン 2002
2019 年 1 月 5 ～ 6 日　於ことぶきアリーナ千曲 (長野県)

U-18 フットサルリーグ・チャンピオンズカップが、はじめて信州で開催されました。

初日の代表者会議では、この大会の二つのねらい、「U-18 年代のレベルアップ」と「日常的なリーグ環境の整備」について、主催者の思いを熱く語らせていただきました。

ベスト 4 のうち 3 チームが F リーグの下部組織です。「U-18 年代のレベルアップ」の背景が理解できます。その中で優勝したのが京都橘高校サッカー部であることも、この年代の育成・強化の多様性が感じられます。U-18 年代にはさまざまなクラブが存在します。レベルやニーズに応じて「日常的なリーグ環境の整備」を進めてください。夜の指導者懇親会ではゲームの話とともに、各地のリーグ戦の様子が語られました。こういう機会は大事ですね。

ここで改めて、私たちが考える「リーグ環境」「リーグ戦」について述べておきます。

リーグ戦は“組織”です。特定の個人や業者に任せて「総当たり戦を行う」ものではありません。ゲームを楽しむ人たち自身で自分たちの活動をささえる－自主運営と受益者負担が原則です。ささえる活動を楽しむマインドが根底にあります。

リーグ戦は“生活”です。平日のトレーニングと週末のゲームで 1 週間の「サイクル」を形成し、リーグ期間が「シーズン」となります。ワンデーマッチで「総当たり戦を行う」ことではありません。リーグ期間をどこに持っていくかは大きな課題です。地域ごとの事情もあるでしょう。皆さんからのご意見をいただければ幸いです。

リーグ戦は“あそび”です。“あそぶ”の前につける形容詞は「自然に」「ちゃんと」「本気で」「徹底的に」がふさわしいでしょう。定期的に“あそぶ”仕組みがリーグ戦です。言われたから「総当たり戦を行う」のではありません。やりたいから、やりたい人がやるのです。

NPO 法人サロン 2002 の“志”は「スポーツを通してのゆたかなくらし」です。それは徹底的に“あそぶ”ことが根底にあります。「生きる」だけならなくてもよいが、「よりよく生きる」には欠かせない文化であるスポーツやアートの原点にある“あそび”を、私たちは大事にしています。

主管の長野県フットサル連盟はじめ運営に携わってくださった方々、そしてスポンサーとしてささえてくださった方々、応援してくださった方々、ほんとうにありがとうございました。

来年も、その先も、toto の助成を受けながら、しっかりとこの大会を支え続けてまいります。

どうぞよろしくお願い申し上げます。

特定非営利活動法人サロン 2002
理事長　中塚義実

ユース年代にリーグ戦を③

第14回合同研究会のテーマ「“遊び心”を育む」について

筑波大学附属高等学校　中塚義実

「第 14 回 筑波大学附属小・中・高等学校 体育・保健体育科合同研究会 資料」より転載
主催：筑波大学附属学校教育局、筑波大学大塚地区「四校研」
2019 年 1 月 26 日　於筑波大学附属中高

■ 14 回目の合同研究会と本年度の準備過程

『月刊 体育科教育』での連載（2004 年度）を引き継ぐ形で 2005 年度より本研究会が始まり、今回で 14 回目となる。はじめの 10 回は＜小・中・高「保健体育科」授業の一貫性について考える＞を大テーマに掲げ、取り上げる種目や領域を小・中・高であわせて公開授業を行ってきた。第 11 回大会では「これまでの 10 年間をまとめて」考える場を設け、第 12 回大会からは「フェアプレー精神を育む（2016 年度）」、「かかわりあいで学ぶ（2017 年度）」と、種目や領域でない“共通テーマ”を設けて小・中・高の授業を公開してきた。

今年度の共通テーマをどうするかについて、年度はじめの四校研（附属小・中・高と大学の教員で組織される研究会。年 3 回開催される）で議論した。10 年に一度の学習指導要領改訂期にあたり、参観者もそのことを意識しているだろう。だから学習指導要領に関連するテーマ設定は一つの方法だ。しかしもっとその前に、現場で感じることから何か導き出せないか。児童・生徒を取り巻く環境の変化は著しい。子どもたちには、変わらないところもあるが大きく変わってきたところもある。このような状況の中で、体育の意義をどのように捉えていけばよいのか…

このような議論の中で出てきたのが、今回のテーマ「“遊び心”を育む」である。「言いだしっぺ」の私は本研究会の立ち上げに深く関わった者であり、附属高校で 32 年間の“定点観測”を続けている。

日頃から感じる問題意識も含め、今回のテーマ設定に至る「思い」を述べてみたい。

■「“遊び心”を育む」に込められた思い

個人的な話で恐縮だが、私の少年時代、日本は高度経済成長の真っただ中にあった。都市化、核家族化が進み、それ以前の日本とは大きく変わろうとする時期だったのだろう。「働き方改革」といった言葉はなかった時代である。大人たちはモーレツに働き、ゆたかな「サンマ（時間・空間・仲間）」を持つ子どもたちは、屋外で、群れをなして、徹底的に遊んでいた。

学校が終わるとすべて自由時間である。習い事はない（そろばん塾に通う子はいたが私は関係ない）。アポなしで友だちの家へ行って誘い出し外遊びを始める。遊び空間は近くの小川や池、田んぼ、裏山などの自然の中だったり、神社の境内や原っぱなど多様である。子どもの数が多かったので遊び仲間に困ることはない。友だちが弟や妹を連れてくることも多々あった。その際、幼い子には特別ルールが適用され、「おみそ」「おまめ」として一緒に遊んだのは言うまでもない。路地裏の野球ごっこは「三角ベース」。自分が塁に出ているのに打順が回ってきたら「透明ランナー」。このような工夫をしながら、みなでわいわい言いながら遊んでいた。高学年になると放課後の校庭で遊ぶことが多くなったように思う。そこで私は、“遊びとしてのサッカー”にはまる。組織的な少年サッカーは私の住んでいた地域にはなかった。子どもだけの自由な世界。ルールや遊び方は自分たちで工夫する。けんかもしたし、けがもした。いやなこともたくさんあったが、いまとなってはよき思い出である。

そのころから実ははじまっていたのだろう。子どもの遊び環境は少しずつ、ときには猛烈な勢いで変化を続けた。気がつけばかつてあった「サンマ」は喪

失し、子どもの成長にとって不可欠とされていた“群れ遊び”は崩壊した。これからどうなっていくのだろう。たいへん心配である…。

このことは私の学生時代からすでに指摘されていた。そして教員になって 10 年ほどたったころ、体育に「体ほぐしの運動」が入ってきた。“群れ遊び”でやっていたことを学校教育の中で取り上げるのだそうだ。それからさらに 20 年ほど経過した。“群れ遊び”を経験していない世代が親となり、この 10 年で「ゲーム」「スマホ」が青少年の世界を支配した。まったく恐ろしいことである…。

附属高校研究大会では今年度、「社会の変化と保健体育科の使命」を取り上げ、生徒の変化について意見交換した。教科分科会資料から「近年感じる生徒の変化」について書かれた部分を引用する。

- 自由な「遊び」が下手になっている。自分たちだけで工夫できない（しようとしない）。
- すぐに教師に「正解」を求めようとする。教師に言われたことは忠実に実践する（よくできる）。教師の後押し（お墨付き）があれば大胆に“遊び心”を発揮できる（潜在的には「持っている」？）。
- 少年サッカー経験者が増えてきた。サッカーの普及もあるが、それよりも本校生徒の家庭環境が影響しているのではないか（子どもを習いごとに通わせる余裕がある。サッカーは習い事の一つ）
- スポーツは習うもの、教えてもらうものという意識が強くなってきた。水泳教室や体操教室だけでなく、サッカーさえも「習っていた」という言い方をする。
- 集団での意思決定がますます下手になってきた。多数決への依存傾向は以前もあったがその傾向が強くなっている。複数の意見を集約して「これでいこう！」と決断できるリーダーがいない。
- その場で解決せず「あとは LINE に送っとくね」で話し合いが終わる。一人でいる時間にいろんなグループの LINE 情報に振り回され、帰宅後もいつも忙しそうにスマホとにらめっこしている。
- スマホとのにらめっこを注意すると「スマホで勉強やっている（友だちに聞いている）」。しかししばらくするとスマホでゲームをやっている（保護者会で出てきた話）
- 行事や委員会などで「前年のマニュアル」への依存傾向が強く、新しいアイデアが出てこない。マニュアルには目を通すが、「なぜこうなっているのか」「どういうねらいがあるのか」について考えようとしない。マニュアルやデータは受け継ぐが“魂”を受け継がない。
- マニュアルも「見といてね」だけで、実はきちんと読み込んでいないのではないか。（引用ここまで）

高校生の現状について、「言い出しっぺ」の私は強い危機感を抱いている。そしてこうなった最大の原因は「群れ遊びの崩壊」にあると理解し、「“遊び心”を育む」体育授業の必要性を強く感じている。

■参観のために

附属小・中・高の保体科教師が全員私と同じ考えを持っているわけではない。また“遊び心”の意味のとらえ方も一致しているとは限らない。参観された方々も含め、意見交換を重ねながら問題意識を共有し、今後の見通しを共通できれば幸いである。

授業担当者は、今回のサブテーマである「遊び心を育む－楽しみ方の工夫」を意識して授業を組み立てた。次の点を意識しながら授業をみていただき、協議会で意見交換できればと考える。

1）各授業のどこに“遊び心”を喚起させる工夫が施され、児童・生徒はどのように反応しているか？
- 小学校：ルールの工夫やアレンジ、じゃんけんという遊びを取り入れることによって…
- 中学校：ルールを仲間とともにつくり出すことによって…
- 高校　：運動に“リズム”や“競争”といった遊びの要素を加味させることによって…

2）小中高の各段階において児童・生徒は“遊び”をどのようにとらえているのか？

3）「“遊び心”を育む」ことの意義は？　体育で担うことの可能性と課題は？

■高校 3 年生のコメントより

最後に、高校 3 年生が書いた文章をご紹介したい。高 3 後期の授業は、これまで学校体育であまり取り上げられることのなかった運動・スポーツの中から、生徒自身で選び、仲間を集め、企画・運営していく選択実技である。今年度は「スポーツ鬼ごっこ＆カバディ」の授業が 10 時間行われ、最後に「“遊び”に

ついて」書かせた。次のような課題である。

> **“遊び”について**
> 10 時間の授業の初めに、この授業の中核は“遊び”であること、本気の“遊び”が人を育てるということ、ちゃんと遊べる奴はちゃんと仕事もできる（遊べない奴は仕事もできない）ことなどを中塚が熱っぽく語りました。単元を終えて、“遊び”をどのようなものだと感じ、何を考えましたか？

A さん（附属小・中出身：女子）

“遊び”を行うと、たとえその人が知り合いでなくても心を通わせることができると思った。参加している全員が同じ環境で頭を使い、勝つことに対してのみ尽力する姿は、純粋で楽しいものであった。“遊び”には（今回の場合、鬼ごっこでは）ただ単に運動神経が露わになるのではなく、人柄も現れる。人を助けに行く人がいれば、ずっと隠れ続ける人がいて、集団で攻めていこうとする人がいれば、個人行動を好む人もいる。様々なゲームを行うことで、各々の戦い方や考え方が垣間見えたような気がする。

小学校の頃、自分が友だちを見るポイントの一つとして「遊びの上手さ」があったと思う。手元にお金もなければ、多くの道具がない中でどう遊ぶのかを無意識のうちに頭を使って考えていたと思う。そのような頭の柔軟性が 18 歳になり無くなっているように感じた。また初対面の子でも何ら気兼ねなく一緒に“遊び”、すぐに友達になる力は子供ならではかと思った。現代社会では遊び場が減り、電子機器の増加が起こっており、子供元来の遊び方を忘れてしまっているようだが、今回、外で走り回ることでしか得られない遊びの良さを再度確認できた。

B さん（附属小・中出身：女子）

私はスイッチの ON、OFF がきれいにわかれている人間である。したがってスイッチが ON の時しか本気になることはできない。私にとっての「遊び」は通常スイッチ OFF の時に行われる。一方、私の中での「本気になる」とは、ある事に神経をすべて集中させて食事をするのも億劫になるくらい夢中になることである。したがって私にとっては「本気」と「遊び」は結びつかない。もちろん「本気になる」ことで楽しいと感じることはいくらでもある。だがもし「本気」になったときの楽しさを「遊び」と定義してしまったら、スイッチが OFF の時に楽しむものを何と定義づけるかが難しい。「遊び」ながら私の言う「本気」になれればいいのだが、それはなかなか難しい…

C くん（附属小・中出身：男子）

「遊べない奴⇒仕事ができない」の対偶は「仕事ができる⇒遊べる」で、確かにそれは当てはまると思う。まず「仕事ができる人」の特徴は、要領がよく、よく周りを見れて、ON と OFF の切り替えがうまいことであると思う。そういった意味で、そのような人は当然遊びができる。なぜなら、「遊び」とは OFF を全力で楽しむということだと僕は考えるからだ。遊びは確実に OFF に属する作業であるが、そこで ON であるときに重要なことを、ある一定の型に当てはめてその力を発揮することができないと、遊びを楽しむことはできない。遊びは社会の仕事の縮図なのだ。だから、遊びと仕事は密接に関連しあっており、仕事ができる⇒遊べるというのはある意味自明のことである。

個人的に、遊びはリーダーシップとサポーターシップを養成する場だなと感じた。遊びでは失敗はむしろ歓迎されるので、失敗をくり返すことで、どうしたら人を楽しませることができるかを学び、社会に歓迎される人材となることができる。

D さん（高校からの入学生：女子）

遊び、と言われると、何か幼いような気がしてしまうが、どのように楽しむのか、というのはとても大切だと思った。自分だけでなく相手も楽しませるためには、いろいろな工夫が必要だし、やるべきことがわかっていないと楽しむこともできないというのは、遊びにも能力があるということなのかと感じた。

一人ひとりが個人で楽しんでいっても決していい“遊び”はできないし、逆に周りに譲ってしまったら楽しめない。積極性も、周りを見る力も大切にしなければいけない遊びは奥が深いし、だから楽しいのだろうとわかった。ふざけるという意味での遊びではなく、考えながら楽しむ遊びなら、どんなことでも遊びの要素を持たせることで、積極的に取り組めるような気がした。

【補足資料】

ヨハン・ホイジンガ

(高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』、1973、中公文庫)

＜遊びの定義＞　①自由、②分離、③規則

遊びとは、あるはっきり定められた時間、空間の範

囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である。それは自発的に受け入れた規則に従っている。その規則はいったん受け入れられた以上は絶対的拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのもののなかにある。それは緊張と歓びの感情を伴い、またこれは『日常生活』とは『別のもの』をという意識に裏づけられている。

ロジェ・カイヨワ

(清水幾太郎ほか訳『遊びと人間』、1970、岩波書店)
＜遊びの定義＞　①自由、②分離、③未確定、④非生産性、⑤規則、⑥虚構

①自由な活動；すなわち、遊戯者が強制されないこと。もし強制されれば、遊びはたちまち魅力的な愉快な楽しみという性質を失ってしまう。

②隔離された活動；あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲内に制限されていること。

③未確定の活動；ゲーム展開が決定されていたり、先に結果がわかっていたりしてはならない。創意の必要があるのだから、ある種の自由が必ず遊戯者側に残されていなくてはならない。

④非生産的活動；財産も富も、いかなる種類の新要素も作り出さないこと。遊戯者間での所有権の移動をのぞいて、勝負開始時と同じ状態に帰着する。

⑤規則のある活動；約束事に従う活動。この約束事は通常法規を停止し、一時的に新しい法を確立する。そしてこの法だけが通用する。

⑥虚構の活動；日常生活と対比した場合、二次的な現実、または明白に非現実であるという特殊な意識を伴っていること。

	アゴン（競争）	アレア（機会）	ミミクリ（模擬）	イリンクス（眩暈）
パイディア				
⇕	ルールのない 競争	番決め唄	子どもの物真似	子どものくるくる回り
	ルールのない 闘争	表か裏か	幻想遊び	回転木馬
	ルールのない など		玩具の武器	ブランコ
	陸上競技	賭け	仮面、変装	ワルツ
		ルーレット		祭の見世物
	ﾎﾞｸｼﾝｸﾞ、ﾋﾞﾘﾔｰﾄﾞ			スキー
	サッカー、チェス	宝くじ	演劇	登山
	スポーツ競技一般		一般のｽﾍﾟｸﾀｸﾙ芸術	綱渡り
ルドゥス				

深谷昌志

(『子どもと学校の考現学』2017、黎明書房 p.106)
(前略)「鬼ごっこ」でも「水雷艦長」でもよいが、遊んでいる内に、子どもは心身ともに成長していく。そうした遊びの効用を拾い上げると、①外で体を動かすから、健康を増進する。②遊びの中で、創意工夫を凝らすので、意欲が育つ。③友だちと遊ぶことを通して、人間関係の持ち方を覚える。それと同時に、④子どもだけで集団をつくるので、集団での行動様式が身につく。あるいは、⑤遊びを通して気晴らしができるなどとなる。そうした意味では、群れ遊びは、子どもの心身共の成長を促す「豊かな遊び」となる。(後略)

ピーター・グレイ

(吉田新一郎訳『遊びが学びに欠かせないわけ』2018、築地書館)
＜遊びとしてするスポーツからの教訓＞

教訓 1. 試合を続けたければ、全員を満足させ続けなければならない
教訓 2. ルールは修正可能で、プレーヤーたちによってつくられる
教訓 3. 対立は、話し合い、交渉、妥協で解決する
教訓 4. あなたのチームと相手チームの違いは一切ない
教訓 5. よいプレーをして、楽しむことの方が、勝つことよりもはるかに重要

ゆたかなリーグ戦文化の創出を！
ーDUOリーグからのメッセージー

DUOリーグは、東京都文京区と豊島区の高校運動部とクラブユースで1996年度からはじまったサッカーのリーグ戦です。4～8月に前期リーグ（昇降格あり）、9～12月に後期イベント（8人制大会など）を行い、サッカーのシーズンを明確化しました。2003年度からは足立区と中央区も加わり、東京都第2地区リーグとして実施されています。
リーグ戦のオフシーズンに、フットサルに取り組むクラブも多々あります。

ただ単に試合を消化するだけでなく、「DUOリーグの理念」の実現へ向けて、個人、チーム、クラブ、そしてリーグ全体で取り組んでいます。2008年度に「履けなくなったサッカーシューズでできた履けるトロフィー」を制作しました。リサイクルプロジェクトにつながる事業です。12年間使用したこのトロフィーも2019年度リーグが最終です。

＜DUOリーグの理念＞
1）サッカーの生活化 → 「歯磨き感覚」「引退なし」のスポーツライフ
2）「補欠ゼロ」のゆたかなクラブ育成 → チームからクラブへ
3）強いチームとたくましい個の育成 → レベルアップ
4）サッカーをささえる人材の育成 → 自主運営と受益者負担

加盟クラブは、都立小石川、昭和一、三菱養和SC、京華、都立向丘、筑波大附属、学習院、豊南、本郷、豊島学院、城西、郁文館、駒込学園、巣鴨、立教池袋、獨協、都立豊島、淑徳巣鴨、都立竹早、日大豊山、都立文京、都立足立、都立江北、足立学園、都立荒川商業、中央大学高校、都立千早、文京区中学生選抜、FC西巣鴨03、都立足立新田、都立淵江、貞静学園、都立青井、都立足立西、都立足立東で、1クラブから複数チーム出場も、複数クラブの合同チーム出場も可能です。レベル別に1部、2部、3部に分かれ、上位リーグとの昇降格もあります。

DUO LEAGUE™

http://www.duoleague.com